

わたしの聖戦

◎◎女性が働くということ◎◎38

医学博士・医学ジャーナリスト 植田美津江

泣くというごと

人はよく、年を取ると涙もろくなるという。逆に、大人になるとちよつとやそつとのことでは泣けないという声もある。いったいどちらなのだろう。

最近、「笑い」が話題になる。医学的効用の観点からいえば、笑うことが血糖値を安定させたり、がん細胞の芽を食べてくれるナチュラル・キラー細胞を活性化させたりすることがわかっていて、では、「泣く」効用はいかに？

「からだにいい」のは笑うも泣くも一緒ということになる。

「泣き女」なる仕事がある。あちこちの葬式に行ってはさめざめと、あるいは大声を出して泣くという、れっきとしたビジネスである。雰囲気盛り上げるためだけでなく、何らかの目的、例えば葬式にやって来る故人の借金取りの同情を買うなどのニーズに従って雇われる。

デキル女優なら、ここぞというときに涙を流すことができる。実際、若手の女優を使って、あらゆるシチュエーションを設定し、60秒以内で泣けるかどうかを観察す

るバラエティーがあったが、これがほとんど「泣ける」のに驚いた。お望みに合わせて左右の目どちらからでも自由に涙を流せる人もいるというからすごい。

ブームを超えて日本文化に定着した韓流ドラマ

では、男性がよく泣くのだと評判であった。注意して観てみると、ほんと、よく泣くのである。ヤクザの親分に裏切られたといつては泣き、恋人に振られたといつては涙をポロポロ流している。そこに純情さを感じ、韓国俳



優の人氣がブレイクしたとの分析もあるほどだ。映画評論家の川本三郎氏によれば、最近の映画では男性がよく泣くのだという。それだけ男の弱さが認められてきたからだと解説する。ときどき映画館で、嗚咽（おえつ）

を洩らす男性を見かけることがあるが、それを見て「みっともない」とか「男のくせに」と思ったことはない。むしろ自分の感情に素直に従っているようで、好ましくホッとさせられる。ほとんどの男性は、幼い頃から周囲の大人に「男らしくあれ」と諭されて育っている。それが強迫観念となり、感情表現の苦手な人間性を形作っているのだとしたら、けっこうコトは難儀である。日本人は、痛みを我慢することが美徳だといわ

れ、その習慣が痛みに対する医学の遅れを招いたといわれているくらいだ。がんに対する人々の恐怖は「死ぬ」ことにあるのではなく、想像を絶する「痛み」にある。痛みも泣くことも、我慢せずに率直に表現したほうが、万事うまくいく場合も多々あるのではないだろうか。

「朗読者」（ベルンハルト・シュリンク著）、「博士の愛した数式」（小川洋子著）、「わが谷は緑なりき」（ジョン・フールド監督）、「心の旅路」（マービン・ロイ監督）、「めぐり逢い」（レオ・マッケリー監督）、「無法松の一生」（稲垣浩監督、阪東妻三郎主演）……

以上は、私が泣ける本や映画の一部です。コラムをお読みの皆さんは、最近ちゃんと泣いていますか？

イラスト・三浦義雄